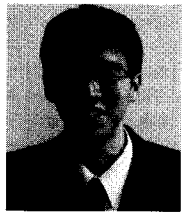
ものづくりコンテスト全国大会

～頂点に立って～

去る十一月十九、二十の両日、第十一回高校生ものづくりコンテスト全国大会が東京で行われた。本校からも三名の生徒が四国代表として出場し、電子回路組立部門では、電子機械科三年の山本達也君が優勝、木材加工部門では、建築科三年の小倉優貴君が三位に入賞した。

今号では、電子回路組立部門で優勝した山本君に、この大会にかけた思い、大会を終えて感じたことなどを語ってもらった。

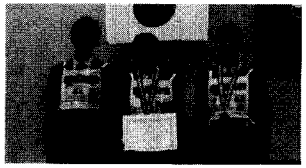


山本　達也君

1　全国大会で優勝したときの気分は？

まず初めに、二時間半の作業の後、プログラミングのプレ審査があります。プログラミングの問題は七問あります。五問目が難しくてつまずき、普段なら十分で解けるところに三十分かかってしまいました。ここは、ひたすら粘ってその問題を解き、残り時間が十分ぐらいになったところで後の二問を解いて、全体を見直しました。審査の結果は一問ずつ発表されます。やはり五問目は、緊張感と普段あまりやったことのない問題であったため、解けていない人がほとんどでした。六問目までで全問正解者は二名、最後の問題でたった一名の全問正解者となり優勝に近付きましたが、昨年の全国大会では二問落とした人が優勝していたので、まだ「油断はできない」という気持ちがありました。

全体の結果は、さらにその二時間後の閉会式で発表されます。「愛媛県立――」という声を聞いたときにはまず驚き、しばらくは実感がわきませんでした。ただ、実力は出し尽くしたという思いがあります。



左から　楠本君（電気工事部門）
山本君（電子回路組立部門）
小倉君（木材加工部門）

2　それまでに苦労したことは？

二年生のときには、決まった活動場所がなくて苦労しました。家に持ち帰ってやったり、校内の空き教室などを転々としながら活動していました。しかし、その年に先輩が四国大会で入賞したため、今年度からは活動するための場所を確保してもらえました。ただ、そこで活動するためには、まずペンキ塗りから始めなければなりませんでした。また、夏はとても暑い場所で、まだまだつらい環境での活動が続きそうです。

競技の内容はプログラミングと半田付けの技術を競うものです。私は半田付けがあまり得意ではなかったため、県大会のときに卒業した先輩に実際にやって見せてもらい、アドバイスを受けました。その後は毎日基盤を作り、多い日には四、五枚作ることもありました。熱の伝わり方がわかるとうまくできるようになり、四国大会の頃にはそこそこやれるようになっていました。また、回路の知識がないと奇想天外な問題に対応できません。全国大会で突飛な問題が出ることはあまりありませんが、四国大会では時折そういった問題が出されることがあり、こちらも気を抜くことができませんでした。

全国大会が近付くにつれてつらいと感じたのは、この大会が入試の一週間後だったことです。入試のほうが先にあり、幸いにもコンテストの三日前には合格通知をもらっていたので、最後には落ち着いて取り組めましたが、入試の結果が悪かったりしたら、もっとつらかったろうと思います。

3　今後の目標は？

今回の優勝で、全国一位というこれまでに経験のなかった場所に立ちました。賞状一つとっても全国大会では何枚もあり、そのほかにもいろいろなものをいただきました。何よりも、一位と二位との違いを実感しています。このポジションをワンチャンスで獲得しなければならないのは大変なことだと思います。四国大会で優勝したときに、ある企業の方とのご縁ができ、その方が全国大会も見に来てくださったのですが、優勝した後に「勝者の気質を持て」とアドバイスをくださったのが印象に残っています。背負うものの大きさを自覚しながらも、まだまだ未熟だという意識を忘れず、勝っても努力を怠らない態度を持ち続けることが大事だということです。非常に重みのある言葉でした。

今後は、大学に入学するまでの間に、電子回路については習得できるものはできるだけ習得しておきたいと思っています。そして、後輩にも残していけるものはしっかりと残していきたいと思っています。大学入学後は、もっと勉強してスペシャリストになると同時に、外の世界ももっと広く見てみたいと思っています。